

(様式6)

長嶺めぐみ 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 Structuring Communication Difficulties of Foreign Residents When
Visiting a Medical Institution in Japan
(在留外国人患者の医療機関受診時のコミュニケーション上の困難さの構造化)
THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL 第72巻 第1号 令和4年2月 (in press)
Megumi Nagamine, Yoshie Mori, Yoshio Ohyama

論文の要旨及び判定理由

日本における在留外国人数は、出入国管理及び難民認定法が改正された1990年以降、年々増加してきた。日本語が十分に話せない在留外国人は医療機関を受診した場合、「言葉が通じないこと」を理由に、様々な困難な経験をしている。しかし、先行調査では、約2割の医療従事者は、専門の訓練を受けた医療通訳者を「必要ない」と回答するなど、医療通訳利用の利点の理解が進んでいない。また、外国人患者側からのコミュニケーションに関する調査もほとんど行われていない。

本研究は、以下の2つを目的に行った。①日本語が母国語でない在留外国人患者が日本の医療機関を受診した際の経験から、コミュニケーションに起因した困難さを明らかにして構造化する、②在留外国人患者への適切な医療提供のためのコミュニケーション上の方策を検討する。

対象は、①在留資格を持ち、生活基盤を日本国内に持つ者、②日本語能力に不安を抱える者、③日本の医療機関を受診または入院の経験がある者の3条件をそなえる在留外国人であった。対象に対し、半構造化面接調査を行った。データの分析は、看護概念創出法を適用した。

18人の面接内容を分析した結果、8コアカテゴリが形成された。形成された8コアカテゴリは、【患者主体のコミュニケーションの重要性を軽視した医療サービスの提供】【医療従事者間に存在する異文化適応能力の格差】【医療従事者による機械翻訳の一方向的な活用】【日本の病院や文化に関する情報不足】【日本の医療に対する過度な期待】【外国人コミュニティが抱える構造的問題】【適切な医療を受けるために医療専門の通訳が必要であることの認識不足】【患者の期待に応える医療専門の通訳能力の獲得と維持の必要性】であった。この8つのコアカテゴリは、コミュニケーションに起因した困難さの発生要因と医療通訳の利用拡大をする上での問題の2つに大きく分けられた。

在留外国人患者の立場からみた医療コミュニケーションに起因した困難さの発生要因は、医療機関・医療従事者と在留外国人患者の両者に存在したが、その背景には外国人コミュニティが抱える構造的問題が存在した。外国人コミュニティへの日常的な支援が、在留外国人への適切な医療提供のためにも必要である。また、医療コミュニケーション上の対策として医療通訳の積極的な導入が考えられるが、①在留外国人患者の医療通訳につい

での認知の向上、②医療従事者側からの積極的利用の提案、③医療通訳者の高い通訳能力の獲得と維持が課題である。

以上より、本研究は今後の保健学の発展に寄与するものと認められ、博士（看護学）の学位に値するものと判定した。

(令和4年2月4日)

審査委員

主査	群馬大学大学院教授 看護学講座	近藤由香印
副査	群馬大学大学院教授 看護学講座	内田陽子印
副査	群馬大学大学院教授 看護学講座	岡美智代印

参考論文

1. 日本の医療通訳を取り巻く現状と課題に関する文献検討
日本国際看護学会誌 2(1) : 8-17, 2019.
長嶺めぐみ, 森淑江
2. 医療通訳の実態と質向上に向けた課題
-群馬県における派遣型医療通訳の実態報告書を事例として-
日本国際看護学会誌 3(1) : 32-42, 2020.
長嶺めぐみ, 森淑江, 瀧澤清美